

岡本クリニック、神戸アーバン乳腺クリニックの

これまでそしてこれから

岡本クリニック副院長
神戸アーバン乳腺クリニック院長
小西 豊

12年前の平成17年の4月に岡本クリニックに乳腺科を新設し、その診療を担当しました。入院手術の設備がなかったため、乳がんが診断された患者さんの手術は神鋼病院（現神鋼記念病院）で行いました。外来受診患者さん、乳がん患者さんは年を追って増加。平成18年の私が行った年間乳がん手術例は160例強となり、この160例強と併せ神鋼病院の年間手術症例数は223例で、兵庫県下で最多手術例となりました。

平成19年3月に、手術、入院治療が行える有床診療所アーバンクリニック（平成22年1月から神戸アーバン乳腺クリニックに名称変更）を新設しました。

診療のモットーは親切で、分かり易く、丁寧に。特に乳がん患者さんの診療に当たっての基本は、臨床試験等で樹立された治療法を基に、患者さんの価値観、生活観も重視し、さらには私自信の長年の経験も加味して話し合い、患者さんが十分納得されて治療を受けていただくことです。

このような診療姿勢は皆さんに認めていただけているようで、岡本クリニックの外来受診患者さんは年々増え、現在新規の外来受診患者さんは週50人から60人で、再診の患者さんと併せ、1日の外来受診患者さんが約100名を超えることがあります。

このような状況で、患者さんに負担がかからないように診療方法、検査手順に工夫を加え、待ち時間が長くないように努めています。これまでの実績として手術件数、診療面での工夫について紹介します。

手術件数

下図に示すように、神戸アーバン乳腺クリニックでの10年間の乳がん手術症例数は1739例で、平均年間手術例は174例。乳房温存手術の施行割合は75-80%です。良性腫瘍等の手術例929例を加えると10年間の手術症例数は2668例で、平均年間手術症例数は267例となります。

小規模クリニックではありますが、これだけ多くの患者さんの診察をし、多くの手術が行えていることは、皆様に信頼できる診療を提供できているのかと安堵しております。



乳房温存手術での創意、工夫

神戸アーバン乳腺クリニックでは日々創意、工夫の心構えで診療に臨んでいます。その一つが、乳房温存手術での整容性（見栄え、手術した方と、しない方の対称性）の保持ための工夫です。

その信念は、今までに培ってきた手術技術を駆使して、乳房温存手術を受けた患者さんが日々手術を受けたことを忘れるくらい整容性の良い乳房温存術を行うことです。すなわち、病巣を摘除するための傷は、ほぼ全例で乳輪部または脇の下とし、これらの領域を除く乳房の皮膚には傷を入れません。病巣摘除後の乳腺欠損部の修復にも様々な工夫を行っています。

同時乳房再建術の開始

同時乳房再建手術が保険収載されたことから、神戸赤十字病院形成外科の先生と提携して、同時乳房再建手術も実施しております。平成 27 年 10 月から実施し、2017 年 3 月までで 34 人の患者さんに行いました。

化学療法の副作用発現の抑制対策

手術前・後の化学療法、再発時の化学療法に使用されるタキサン系化学療法剤（パクリタキセルやドセタキセルなど）の副作用に手・足先しびれがあります。しびれが強くなると、日常生活に支障を来します。このしびれの発現の予防対策も行っております。このしびれの発生を軽減するため、当方ではタキサン系薬剤を投与する時に、頭部、手・足先の冷却法を行っています。しびれの発生率が低下し、発生した場合でも程度が軽くなっています。

岡本乳腺クリニックの新規開院

この2年は、山元奈穂医師と二人で診療に当たってきましたが、平成28年9月から鶴原知子医師が加わり3人となりました。そこで、身近な乳腺専門クリニックをと考え、阪急岡本駅の南に歩いて2分の所に、平成29年2月に岡本乳腺クリニックを開院しました。女性医師ですので、女性の立場に立ってより身近な診療が提供できると思っています。

今後の方向性

化学療法時の効果を落とさず、患者さんにかかる負担を少しでも軽減する方を追求し実施することです。

このように、岡本クリニック乳腺科、神戸アーバン乳腺クリニックそして岡本乳腺クリニックでは、一人でも多くの患者さんが診察してもらってよかった、納得また満足できた治療を受けることが出来たと思っていただけるよう、さらに診療の質を高めるよう日々考え、努力して診療にあたります。

※数字はすべて、2017年4月30日時点のものです